

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	懷中時計 : 小説
Author(s)	森本, 忠八
Citation	龍南, 1 8 3 : 1 - 2 1
Issue date	1922-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7865
Right	

懸賞當選小説戯曲發表

懷中時計 (一等)

文三甲三 森 本 忠 八

「妾の時計は知らない？」と夫に尋ねて見た處で、「お前の時計なんか知るもんか」位それもひどく氣分でも悪い時なら「知らんよ」と突慥貪に云ひ放つてふいと自分の居間に去つてしまふのが落ちである。も一度詳しく調べ直して見よう、燈臺下暗しと云ふ事もあるから……と直子は確かにこゝに置いてあつたと思ふ机の上から再び探し初めた。さつきは氣が急いでゐた爲につい亂雜に取散らしたものを今度は丁寧の一つ一つ疊の方に移して見た。一輪ざしの氣の利いた硝子瓶までのけてしまつて、後に底の形の四角のまゝくつきり積もつてゐる塵埃を少さい手ばうきで奇麗に掃き取ると、又一つ一つ机に積み重ねるのだつた。殊に「主婦の友」とか「家計簿」とか云ふ書物は一冊毎たゝいてのせたけれども、勿論その狹隘な頁の間から女持とは云へ可成りの容積のある懷中時計がドサリ重たく落ちてくる筈はなかつた。次にひき出しを開けて見た。錐の柄先が先づ目に入つて、下に敷かつた古繪葉書のしみのついた表面を油蟲が狼狽しながら逃げまどふた。一番端までどうどうしまひにはひき出し全体ひつこ援いてしまつた

けれどもそれらしい影さへ見當らなかつた。机のひき出しは都合三つあつた。いつか暇の時、よく整理して置かなくちやと直子は考へながらも、大切な書類も、皺をのばす事もしないで、面倒臭相に酒屋の受取りと一緒に丸める様にしてつめ込んでしまつた。最後に左の端のを引き出した。彼女はの間學校でのお友達が來た時に昔話が出たついで取出して見せた古い寫眞の幾葉かゝ這入つてゐるのを見た。色も既に褪せかゝつて變にばんやりと土色じみて見へたが、この中でも一番古いのは直子が十五の正月に弟達やお友達と一緒にとつたものである。あの日はひどく雪の降る日だつた……………、こんな髪型の昔ではハイカラと云はれた方だつたのだ、この縞物の古臭い柄だつて今どこの古着屋を探したつてありやしないだらう、それに妾のこの嫌やに取すました顔付きはどうだらう、でもあの頃は未だ寫眞と云ふものが本當に珍らしかつたのだから……………。

机の方は斷念あきらめて直子は今度は簞笥だんきの方の詮索にかゝつた。上にのせてあるこざこざした袋の類から小箱の中までかきまはして調べたが目的の品は出てこない。床の間にやつてきて隅に積んであるよそからの贈物なども、たゞいたりひつくりかへしたりして見たがこゝにも見つからない。終ひには部屋の隅つこの薄暗い所に据ゑてある、丁度そんな場所に相應はしい古つゝらまでこぢ開けて見たが誰が好んでこんな所に入れたりするもんかと自分ながら可笑しくなつてしまつてその中を一寸のぞいたばかりで直ぐふたをしてしまつた。

最後の望み——それもはかない望みの様にも思はれたが——は鏡臺であつた。もしやと思はぬではなかつたが夫の居間に這入り込む理由はなし、それに自分の部屋のものが少しでも位置を變へてゐようもの

ならそれを目に角立て、叱りつける程の人だからと直子もさすがにその方には手は下せなかつた。さう云へばこの家で臭いと思ふ場所は大抵探してしまつたし、もうこの鏡臺だけが唯一つ残されたものである。彼女ももうこゝに無かつたら諦めざるより外仕方はないと決心した。そして彼女はこゝにも無いと云ふ事實が余りにむごたらしく自分に見せつけらるゝのを恐るゝかの様に、併し最微の注意を働かせて片端から少しづつ調べていつた。出来るだけ暇ざる様にした積りなのが余り大きくもない鏡臺だけに直ぐ調べはすんでしまつた。そしてこの最後の望みも亦束の間に消し去られた。

彼女はすつかり疲れてしまつて鏡臺の前にべつたり坐りこんだ。長い息をついて鏡に寫つた自分の姿にしばしば見入つてゐたが、俄かに氣づいて着物にかゝつた白い埃の様なものを指の先さでちぎ落とすと頭髮にも一寸手を當てた。

無いとなると無暗に戀しい。それが日常見なれた極くつまらないものであつてもあるべき場所に無いとすれば淋しいに違いない。まして失くなつた品物は高價な時計である。それも母の記念の品である。

盲目の直子の母が死ぬ前に父にも家族の誰にも知らせさこつそり渡してくれた金は可成りの高であつた可成りの高と云つても知れたものだが、男兄弟ばかりの中でたつた一人の娘である直子を殊にいとしがつて、目は見へないながら、目が見へないから一入であつたかも知れないが、この娘の將來の爲に、さうして手に入れたかは分らないが、ひそかに蓄積してくれたにしては、先づ可成と云つてもよかつた。おまけにその時分は直子の家が一番ひどかつた時分で、力量者だと云はれた父でさへうんうん苦しんでゐた位の貧乏世帯だつたから……………。

山内一豊まがひに鏡の裏にしまひ込んで置くなど、云ふ因循な考へは起らなかつた代りに、公債でも買つて……等と云ふけちな、併し若い主婦にしては感心な野心も直子には起らなかつた。帶でも買はうかと思つたが、それにしては折角の亡母の志の前に、ちと不屈過ぎるやうな氣がして、あはて、自分の怪しからぬ慾望を打消した。どこのつまり、直子は夫にだけそつと打明けて相談の結果懷中時計を買ふ事にした。時計なら帶の様に大つびらではなし、實用にもなつて後々にも残るからと云ふのであつた。けれどもいざ時計屋に行くとなると、とにかく何でもいゝ、是だけのお金が品物の形に變はればそれでいゝと云ふ様な極く當坐の出來心から、夫と二人丸い廻轉椅子に腰かけてゐても未だ新婚早々ではあつたし、かうした處を人から見られるが何となく面はゆい氣もあつて、心持うなだれ氣味に見へない程膝頭の邊りをふるはせながら、時計屋の主人がべらべら効能書を説明するのを、人事の様な氣持で聞き流してゐた。がどんなに買物を心急いだ處で、殊に時計等と云ふものは先づ一應手にどつて打ちかへし、打ちかへし調べて見る位のことには必要らしく思はれた。夫は夫で彼女の爲の買物でありながら彼女が余りもちもちしてゐるので時々は、

「之はばうだねね」

と促す様にふり向かねばならなかつた。まさか

「どんな品だつて羨關ひはしません」

とも云へないから、

「さうねね、少しこの型が……」

どうか何と人並みの難癖をつけては時間をつぶした。さうして揚句の果買つたのがあの時計である。金のかかつてゐるだけ裏には寶石などをはめ込んだ奇麗な模様などがあつて月々の僅かな俵給でやつていく洋服細民？の家内の持物としては不釣合に贅澤な代物である。でも直子は買つた當坐はやはり嬉しかつた。それに母のかたみと云つた折紙付だけにどこへ持つて行くのにも憚られず實際彼女は外出の時もきつと帶の間にひそませてゐて、文字通りに「膚身離さず」又「虎の子」のやうに大事にしてゐた。朝など薄暗い中に起き出でてマツチを擦ると必ずこの小さい母の魂が美はしく輝きながら生き生きとした小刻みの音を立てつゝ枕の傍で呼吸づいてゐた。どうかしたはづみにおきまりの正午に巻き損ねる事があつて死んでゐる時などはもうその日一日が呪はれた悪い日のやうに思はれて何かに追かけられるやうな又何かい待ち設けてゐる様な恐れに心をびくつかせながら暮らした。それでどん！となるどたとへその時夫に持つて行くお辨當の用意の最中であつても包みを放り出してかけ上つてはふるふるぬれ手で龍頭を巻くのだつた。友達の前でもひそかに誇りを感じてゐた。「もう何時か知ら」と友達が邊りを見まはすと、そら來たそばかり他愛もなく胸までがどきどきし出して殆ど無意識に帶に手をつき込んだ。「まあ立派なお時計だこと」とお友達が目をみはると彼女は少女のやうに瞳を輝かしながら時計屋の主人が云つた通りな説明をもう一遍こゝでくりかへすのだつた。さうしてその友から「あの方は着物などこそ見すばらしいけれどもきつと内は有福よ、だつてこんな目立たない小さいものに迄之程の金目がかゝつてゐるのだから——」と思はれるのを想像しては心ひそかに喜ばせには居られなかつた。

彼女が時計で得意になつてゐるこの頃の事であつた。或日彼女は學校時代の古友達の幾人かと町のお城

のそばを歩いてゐた。

城壁から少しばかりの青草の空地をおいて細い川が流れてゐた。この川の上流の兩側につゝ立つた家々から無遠慮に投出す汚物の爲めに水は濁りに濁つてひどく温氣のある日などは耐へられない惡臭さへ放つのであつた。けれどもその時は丁度水を横きつてゐるこれは又こんな川にはふさはしからぬ見事な二三羽の家鴨がゐてその水に落した奇麗な影のうごめきの爲にかへつて水までも澄み切つてゐるものやうに思はれた。

城壁の盡くる所はだらだらの上り坂で花は既に散つてはゐたが木並みの揃つた吉野櫻が行儀よく植ゑつけられてぼつりぼつり出しかけた若芽の色と下一面の緑との平行線になつた對照は見る目にも氣持がよかつた。身も心も歡樂の陶醉にまかせ切つた新婚のまどろかな夢からさめてしまつて、幻滅と迄はいかないながらも可滅人妻らしい惱みの數々がそこはかどなく感ぜられてくる既婚の人々が是非一度は通過しなければならぬ哀愁と云つた風の感じが直子の心にもそろそろさざしかけてゐた。平凡に見合はされ平凡に結婚したむしろさせられた彼女は戀の狂熱に世界を火と燒いて、戀人とをどつてをどつてをどり抜く絢爛さはあまりに目まぐるしく、余りに花やか過ぎて到底想像をも許されなかつたらうし、その後に来いで來るべき何ものにもたどへ難き絶望の暗黒に涙をしぼる底の苦惱も勿論味はれなかつたのだらう。けれどもたゞでさむ冷然と見ゆる夫のこの頃の以前にました冷やかなまなざし、荒らしげにさし置く茶碗の音、又それらから受くる妻としての人知れぬ氣苦勞はかうした明るい日の光り、水のささやき、堤の緑をどんなにか乳に飢ゑた心地の彼女に自由なのびのびしさを與へた事か。春は中ばを過ぎ

ながらどこかに尙のどけきのぬけ切らない手近くのそゝろ歩きに柔い陽にもやもやと顔にかゝる懐しいくろ土の息を感じつゝ眠むつてしまはない程度の心のゆとりを静かな氣持で楽しんだ。久し振りに聞く友の未婚のその友の學校にゐた時その儘の聲音が何とはなしに昔を慕はせる晩春のぬるんだ空氣にしつくり調和して、直子は取かへした處女の氣持にうつとると言葉數も少かつた。

川が大うねりに曲つた所何とか云ふささやかな橋の袂に來た時分に、直子達の直ぐ頭の上で素ばらしい午砲の音がひゞいた。全く突然だつたので皆一齊に「アラッ」と軽く叫んだ。直子も夢を破られた態度でまぶし氣に空を見上げながら、

「もうおひるなのかしら」

とつぶやいた。

ここで直子は例の自慢の時計を巻かねばならなかつた。が、いくら自慢でもこんな所で男のやうに仰山らしい手つきで時計を出して巻くなぞと云ふ事はさすがに憚られたので心持歩を緩めて友達を行き過ぎさしてから誰にも覺られない様にそつと巻く積りであつた。

帶の間に手をさし入れた直子はびつくりした。指先さは何物にも觸れないで唯帶と着物との間を徒らに滑つたのみであつた。併し直子は直ぐ先刻時計を見た時にそれを帶には挟まないで墓口と一緒に手巾にくるんだ事を思ひ出して懷をさぐつた。けれどもそこにも手觸りはなかつた。重みのない事で入つてゐないのは分り切つてゐながら念の爲袖をも握つて見たがそこにあらう道理がなかつた。

直子はハッと思つて立止まつた。

「どうしたの直子さん」

と友からよばれて彼女は強いて汗びつしよりになつた顔に笑みを堪へて小走りに彼等に追ついた。早くどうかしなくてはかうしては居られぬと胸ををどらせながらも、或場所迄は友と一緒に歩かねはならなかつた。

それから二三日は直子はものも云へない悄け方であつた。唯一の慰めを不意にさらはれたやうにぼんやりして、何にも手につかぬ有様であつた。

三日目の朝になつて土地の警察から葉書が舞ひこんだ。墓口に彼女の名刺が入つてゐたので直ぐ調べがついたのだつた。彼女は飛び上つて喜んだが未だまだ實物を見ない中は、自分の手にしつかりと握りしめない中は安心がならなかつた。

それで早速弟に電話をかけた。結婚してから一層折りが面白くなつた繼母のゐる實家に、わざわざ出掛けて行つては、あたら氣持を悪くするばかりだと考へたからであつた。それでもそれ以來何の音沙汰もしない繼母に多少氣兼ねしないではなかつた。殊に弟以外の家の誰かが出てくれば、又一面倒と、失物の見つかつた嬉しさにわく／＼しながらも、内々心配してゐた處が——何といふ恵まれた日だつたのか——土曜で早く退けてゐた弟自身か初め頃から電話口に現はれた。

「明日少し用事があるから來て頂戴、朝成る可く早い方がいゝがねね。その代り……………」

「困りましたね明日は友達と一寸約束があるんですがね……………」

「とにかく参りませう、がその……………」

まだ何とか愚圖々々云つてゐるのを姉は思切りよく、

「その代り用事がすんだら、それ、もみち屋をおごるよ」

と笑を含んで誘惑すると、明らさまには直答しなかつたが、結局は参りますと云ふ返答だつた。

「忘れない様にね」

と彼女は念を押して素早くこつちから電話を切つてしまつた。

日曜の朝は約束通り弟が學校の制服を着けてやつてきた。弟の學生らしい無邪氣な現金さと、妙に姉の前に改まつた様子を、直子は心中可笑しく思ひながら、警察から來た葉書を示して只管頼み入つた。弟もどつちかと云へば女から多少拜み倒された形で心では馬鹿々々しい用事を云ひつけられたものだと思ひながらも、澁々と受け合つて出ていつた。

が弟が歸つたのはその日も晝過ぎであつた。

直子はをの變りない時計の美はしい面を久しく離れてゐた子にでも逢ふ時の様な満足さで喜び迎へた。けれども弟の方は姉のねぎらひの言葉も耳に入らない程不平顔にぶつぶつこぼしてゐた。

「安々引き受けて飛んだ目を見ましたよ。警察なんて何度といく所ぢやない。それに拾ひ主の家に迄行かされて十町もあらうと云ふ所を二度も往復しましたせ……………本當に……………」

「まあそんなに面倒だつたの」

「面倒の面倒でないのつて住所氏名から聞かれてそれは／＼御丁寧な事さ。揚句には印まで押せて云

ふのですが所が僕のしか持ち合はせがないでせう、之でいゝか云つたら、それぢやいかぬ姉の認めを持つて来いと云ふんです、結局は爪印でまゐ納まりがついたんですがね。大体僕はあのいやにぶつた様な會計の親爺が氣に食はなかつた」

「おや認めが要るのだつたかね、あんまりうろたへて氣もつかなかつた」

「おまけに會計の奴が云ふのに――拾ひ主は子供だからお禮は三四十錢位でいゝでせう、どうせ墓口には大した金もは入つてゐないようでしたからつて、僕はその時ばかり思はず冷汗が出ましたよ。一体いくら入つてゐたんですか」

直子は顔を赫らめながら

「三圓と少し………」

「併し時計の方は立派なものでしたね」

と彼はそこに置いてゐるのを取上げて色々に眺めつすかしつて見た。けれども學生らしい單純さからその不似合に贅澤な姉の持物の出所迄根深く聞き正さうとはしなかつた。

「その子供つて幾才位いくつなの」

直子はさつきから氣になつてゐた拾ひ主の子供の事をもつと詳細に知らうと思つて尋ねて見た。

「さあ僕は見ないから知りませんがね、巡査の話によると十才だとかつてきゝましたがね、何でも女の子らしいですよ」

「女の子？」

女の子つてどんな顔付きの子供だらう。きつと目のくるくるつとした、そして學校に行く時は大人の様に小ましやくれて靜かに歩いてゐるが親しい人に逢ふと、あのふくよかな腕がワーツと首つ玉に抱きついてきて……彼女は何頃求め求めて夢の中でまでその幻を見てゐた子供の薄い皮膚をすかしてはの紅い血が幸福に脈うつてゐるその頬までも今まざくどよび起すのだつた。あゝ子供がゐたら……。夫婦の間に何かへまな事が起つて、それもこの頃は特に性の悪いやつが多かつたが、夫が散々當り散らした揚句、捨ばちに畜生！と云ふ代りに直ぐ石女うはづめ！と吐鳴るのが常であつて。その時の發作的な感情の興奮から唯わけもなく夢中になつて聞き流してゐたものゝ、石女！と吐鳴られる事が余り度重なるこそこにさう云はせる單に畜生！と云つた意味以外にもつと本質的な考へが蟠まつてゐるやしないかと後からしみじみ反省させられるのだつた。そしてその度毎に直子は子供の幻を頭一杯に書いた。

空は誇張なしに一點の雲影を止めず晴れ渡つてゐたし、あまつさへ日曜と云ふので町にはどこの隅にも嬉々としたものゝどよめきがあつた。活動のフィルム替へを廣告する自動車が喧騒な奏樂をのせて走り去ると、その後に撒き散らされた青や赤の紙を子供や俤夫が争うて拾ひ煙と埃と人どに通りはしばらくは混せつかへされた。

直子達はやがてとある本屋に立ち寄つた。子供への禮として何よりも書物をも思つたからである。初めは何か雑誌をど考へたが、それでは少し淺薄なやうな氣がしてならなかつたので、別に童話の單行本にしたのを出してもらつた。が子供と云つても十才位の少女でどれ位の頭の程度なのか、かうした子供に餘り接する機會のない二人は選擇に少なからず悩まされた。店員にすゝめられるまゝ美しい装釘のイン

ツブを手にとつて見たが、そのいやに氣取つた談理めいた口繪の説明が直子には氣に入らなかつた。さうして結局序詩に子供の愛を歌つた見るから優しい又見かけも一寸氣が利いてゐる「星の子」と云ふ分厚な一冊を選ぶ事になつた。直子はその時の氣分からしても、もつともつと澤山買つてやりたかつた、外にも違つた種類のものをも望んだけれども、弟がその浪費を説いて止まないしそれに第一その本に姉妹する様な瀟洒な手頃なものは一つも見當らなかつた。それでも尙彼女は又二冊迄買つてしまつた。

店員にそれ等を包んでもらひながら、彼女はやはり子供の夢を續けてゐた、どこからとも知れず降つてきたこの小さい美しい贈物を、包装を破つて見た瞬間、子供らしい楽しい叫び聲を上げてそれでも手を觸れるのが何となく恐い様な風で初めはおづ／＼と取り上げるが、この三冊全部が皆自分のものになるのかと思ふと急に嬉しくなつて、しまひにはそこに居耐まらず胸にかい抱いて部屋中を飛び歩くであらう——その子供の花やいだ笑顔を想像しては直子もついほゝ笑まぎには居られなかつた。

初め反對した弟も違つた意味で喜んだ。

「何しろ痛快ですね、無駄は無駄だけれども何しろ之だけ一度にやつてしまふのですからね。あそこの家の奴等がどんな顔をするのだから見物ですよ」

さつき一度洋傘屋に行つた時に、散々馬鹿にあしらはれた腹があるので、結局向ふの思ひもよらない様な大げさな贈物をする事によつて洋傘屋の連中をあつと云はせ、そのあつと云つてゐる目さきに故意^{わざ}とをちついて見せて、自分の腹を癒やさうと云ふ彼の計略であつた。

所が不幸にして弟の期待は見事に裏切られた。若い癖に頭のかかてか光る番頭は、煙管をボンと一つた

たくと、世の中の事は何でも分つたと云ふ態度で口の邊りをゆがめながら、いやに落ちついて長い煙をプーツと吹いた。それから徐ろにお禮の品に手をかけたが、あつともふんとも云はない。當り前だと云ふ至極横柄な目でデロリと見上げて、

「是はお禮までいただいて……………どうも……………」

それなりスツと引き込んでしまつた。それも謙遜ぶつた普通こんな場合によく使用される外交辭的な辭退の言葉一つなしに。

これにはさすがにいゝ可減子供の幻に無暗にとり逆上せてゐた直子も、現實暴露の悲哀と云つた風の氣持を味はずには居られなかつた。番頭の態度を心外に思ふよりも寧ろ自らが傷けられた心地で、禮物を渡すと直ぐにそゝくさ店を飛び出してしまつた……………。

直子は茶の間の火鉢の前に座りこんでももの思ひに耽つてゐた。煙草をのまない彼女は夫が家に居る時だけ使ふ——そして時々は話に上つてくる近所のお主婦さん達にも差出されたが——眞鍮の長煙管をいぢくりながら、さづきから起りかけた考へを丁度この煙管のやうに頭の中であつちこつちとひねくり廻はしてゐた。

ひよつとすると……………併したとへ相手がどんな男にもせよ、假りにも他人のものを盗んだと云ふ事をこつちから切り出すには余程の證據が必要である、そんな裁判所で云ふ様な證據程大げさでなくつてもいゝとした所で……………けれどもひよつとすると、本當にひよつとすると……………もう外の疑はれる事について

ては考へるだけ考へぬいだ末の末の事である——唯一つだけ後に残つた而も可成り有力な疑ひである。それに頼んだ男が外ならぬ百痴だけに……と疑へば疑ふ程益々この「ひよつとすると」が「ひよつとすると」でなくつて、明々白々などうしても動きのとれない眞實の様に思はれ出した。

音次郎とか音吉とか音……何とか云ふに違ひないけれども、自分の年齢さへはつきりとは返答が出来ない所謂八合ものの男はこの近邊で「音」「音」で通つてゐた。云ひつけられた事は曲りなりにでも實に忠實にやるだがそれ以上には一步も出ない、この事は非常に間の抜けた事ながら馬鹿と缺は使ひ様と云ふ文句通りに、その間の抜けた所が又人々に重寶がられる事もあつた。

その日直子はどうしても自身で行かなければならない用事の爲めに外出した。夫婦二人暮らしのさゝやかな住居に何があるかと云へばそれまでだが、しないよりも思つて彼女は一番お手輕な「音」に留守を託した。「音」は是迄にも度々頼んだ事があつたし、大抵氣心も知れてゐたから、さう心残りする事はなかつたものゝ、どうかすると先方の都合で長く暇どるかも知れないのを慮つて、隣りの吉田さんにも一應言ひ置いて出たのであつた……。

きつとあの男のやつた事に相違ない。さう云へば何時もと變つてあの日は特に「音」の素振りが可笑しかつた……と茲まで考へて見て何故かうも分りきつた事が長くも思ひつかなかつたらうと、今更彼女は自分の迂愚と無駄骨折りとを口惜しく思つた。

その夜も飯がすむと直き夫は「友人の所へ行く」と云ひながら家を出た。帽子を差出して、「ではお早く歸つてゐらつしやい」と頭を下げた鼻先きに、玄關の格子がピシヤリと閉め切られた、眞つ面を平手で

ビシヤリとなぐられた様な氣がした。閉め切られたが最後十二時迄は再び夫自身の手で開けらるゝ事のない格子である。直子は暗然となりながら茶の間へ歸つた。例の火鉢の前に行儀よく坐つた。すると又時計の事が頭に浮んできた。是非今夜聞いて見なくては……と思ひながら何となく氣がひけてならなかつた。

十時になるといつもの様に「音」がそばの屋臺車をひつぱつて、その後から妻君が手桶と團扇とを持つてやつて來た。星のさゆる冷へ冷へした晩である。角の俵立場に屋臺をひき込んで、申し譯けばかりの破れ幕をひつ張ると、それで一夜のそば屋は出來上つた。

まさかこつちから押しかけていつて、がみがみと牙を立てるわけにもいかないから、直子は家迄そばを持つてきて呉れる様に命じて歸つてきた。都合のいゝ事には「音」自身が持つて來た。そして何の挨拶一つするではなし、唯ニヤニヤと笑ひながら上りがまちに腰を掛けてしまつた。この男はその場で現金を握らせなければ根つから動かぬと云ふ習慣である。

直子はそのひげのむしやくしやした容貌や肩つきの肉のむくれ上つた身体やらに、可成心を脅やかされながらも、なかに、相手は馬鹿だからと強いて氣をひき立てた。

「今夜は一つお前に聞きたい事があるがね」

膳を横の方に押しやつてからさて改まつた口調で彼女は膝を少し進めて云つた。

「この間妻がお前にお留守居を頼んだ事があつたね、ね、覺へてゐるでせう」

「うん」

彼はどろんとした目を無遠慮に直子の方に投げながらさう答へた。彼女は一寸間をおいて考へてゐたがどうせこんな男には間違ひ事を云つたつて分る筈はないからと思つて、

「その時お前は机の上に置いてあつた懷中時計を盗りやしなかつたかい」

「うんにや」

「大きな玉のいつた時計でなくて、これ位の（彼女はわざわざ指で輪をこしらへて示した）小さい丸い時計だよ、ピカピカ光つた——」

「うんにや」

直子はそれから子供にでも話す様に、色々手を換へ品を換へてやつて見たけれども、何と尋ねられても唯「うんにや」の一點張りで一向要領を得なかつた。しまひには彼女もすっかり癩癩を起してしまつて相手の目を睨みながら、

「盗つたんでせう、どつたならどつたとはつきりお云ひ……でないど……」

と威猛高になつて聲荒々らげに云ふと、「音」は彼女の鋭い視線を避けて下うつむいた。口をもぐもぐさせてゐたが少し鼻にかゝつた聲で、

「どらん——」

どつた之だけである。それも強い母親^{きつ}からきめつけられたまだいたいけな子供のやうに、するぎるした態度で余程の努力でやつと口を出たのらしかつた。彼女もそれ以上追窮する必要もなかつたし、又勇氣も出なかつた。がつかりしてそのびくびくしてゐる男をしばらくは無言の儘打ち眺めてゐた。やがて

いくらかの代金より余分の金を與へると、膳は後で妾が持つてくるからと斷はつて追ひかへしてしまつた。「音」は這入る時と同じ様なのろした足取りでゆつくりと出ていつた。

がそれからものの卅分と經つか經たないかと思ふ時分、「音」の妻がそれはそれは偉い權幕で吐鳴り込んできた。

「盜坊とはあんまりだ、何だつて……………」

斷りもなく上り込んでお主婦さんはまくし立てた。近所の手前もあり直子は盜坊盜坊とよび立てられるのをひやひやしながら、種々云ひわけしたけれどもそんな生温い事ではおさまり相もなかつた。

「……………いゝ、いゝいくら何だつて宅は之でも正直音」つて評判があります。是迄他人様のもの塵一本だつて持つて歸つた事がありませんか。時計を盗むなんてそんな大それた……………それに盜坊とはそりやあんまりだ」

いくらなだめても手もつけられない見脈に、直子もどたんを投げて、云ふならそれだけでも云へと云つた調子に放つたらかして置いた。かうなると向ふも張合がなくなつて自然話も途切れ勝ちになつた。いゝ可減下火になつて語勢も衰へかけた頃、彼女は落ちついた風を装ひながら靜かに、

「それ迄確かに机にあつた筈のものが、音さんが來てゐる間中に無くなつたと云へば、音さんを疑がつて見るのもむしろ當然でせう。何も初めから盜坊だなんて叱りつけたわけでもありません、唯心當りの事をちよいと聞いたゞけのことですわ」

「宅がどんなに何だつて……………」

「ね、そりやもう、音さんの正直な事は百も承知して居ります。けれども道理上さうなるぢやありませんか」

「ハイハイどうせ妾達は學問も何もない貧乏人だから道理も何も分りません。ですから盜坊だなんて輕蔑されるのでせうよ」

直子も思はずむつとして、

「ですが貴女方は妾が警察に訴へて出ていゝとおつしやるの？」

「警察？」

警察の一言は晴天の霹靂であつた。「音」の妻君の様子はがらりと變つた、鳩に豆鐵砲その儘の形できよんとしてゐた。

同じ長屋の八公と云ふ未だ今年十九の若い仲士が、之も若い宿引で停車場につききつてゐる男と共に謀して、貨車から雑多な品物をぬぎ取つては賣とばして近所の遊廓に使ひ込んでゐた。それが一月ばかり前に分つて、二人は監獄につながれた。杖ども柱とも頼む一人息子を失つた八公の老母のその後のみぢめさは、長屋の人々の目にも余る程であつた。

妻君が急に腰をへし折られて意氣地なくも沈み行くさまを直子は勝利者の憐愍を以て凝視してゐた。

「うちが留守してゐた間に無くなつたとすれば責任はうちに在る、さうすれば引張られるのは先づ音さんだらう——困つた、あゝどうしよう」

如何にも當惑した風で呟いてから一家の浮沈この一瞬に在りと、うつてかはつた眞面目さでお主婦さん

は思案に暮れた。やがて妙な顔しながら、

「妾達にかかり合ひのある事だからまあ警察など、事荒らゝげずに願ひたいもんで……その代り出来るだけの探索はこつちから致しませう。それについて奥様とうでございませう。一つ山田のお稻荷様に願つて見たら……」

「それもよさ相ですな。何妾の方は品物さへ出れば何も文句はありませんから……」

それから女はその稻荷様の靈驗あらたかな事、殊に失せ物の的確に當る事を實例を擧げてくどくどしく述べ立てた。直子はお主婦さんの聲のいくらかでも低くなつた事を喜びながら、もう占めたものと云ふ安心で生まあくびをかみしめつゝこの面白くもない御利益話をほどこしでもする心持で聞いてやつた。次の日の夕方飯を終へてから夫婦は縁に出た。狭い庭にたつた一本の柿の木が所得顔に枝葉を張らせて澄徹な秋の夕空を思ひのまゝに仰ぎ見る事を防いでゐた。けれども小廣い葉や、やつと太りかけた果實の黒くうごめく間からほのかながらにもか弱くまたゝく早星の二つ三つをのぞく事は出来た。闇からぬけ出た冷やつこい風が時々訪れて先づ入口の二人を掠めると向ふの壁ぎはにいつてはぶつゝかつた。そこには讀みだめの新聞がうづ高く積み重ねられてあつて一風毎に一番上の紙の端がめくり上げられるのだつた。

一日の事を終へて寛ろいだ家庭的な情感が夫の胸をもしのびやかにたゞいたらしかたつ。彼はいつになく上機嫌な面持で、ものは云はないながら快く煙草をふかしてゐた。直子も夫のその輕やかな煙管の音を嬉しくも聞いてゐた。

とりとめもない二言三言が交はされてから彼女は時計の一件を夫に打明けた。少しおどけた風に何時も笑ひを含み通して彼女は面白く物語つた。夫は黙々としてそれを聞いてゐた。

「稻荷さんなんて考へも考へたものですわね。恐らくあの人の一生一代の傑作でせうよ」
かう云つて彼女は笑つた。

「そして時計は見つかつたかね」

「まだですけど大方今夜當り持つて来るでせう」

庭の隅の蟲が鳴き出した。何事か考へてゐる風の夫はしばらくしてから席を立つた。そして又毎晩の如くに外出するのだつた。

今夜位は家に居てくれるだらうと思ひお主婦さんの可笑しな一場に二人で笑ひ轉げるだらう事を豫期して數月來の夫の機嫌を取りかへす事を望んでゐた直子は一時にがっかりしてしまつた。

十時過ぎになつて案の定「音」の細君がやつてきた。

「見つかりましたよ奥様世の中にや随分悪い奴が居りましてね」

と先づ直子を見ると女は如何にもあきれたと云つた顔付きをして話し出すのだつた。

妻君は朝起きると何を措いても先づ近くのお稻荷様に驅けつけた、そして直ぐに所謂御神託を仰いだのであつた。それによると時計は同じ長屋のお源と云はるゝ老婆が盗んでゐると云ふ事だつた。それから妻君はお告げに従つて歸つてからその老婆の家の塵溜めをそつと行つて漁つて見ると果してその底の方から失せ物が現はれたのだつた……と女は云ふ。

輝きのない瞳のどかかに狡猾さの漂ふてゐる目をしよぼつかせながら「音」の妻はこの見へ透いた妄誕な話を可笑しいまでの眞顔で續けた。そしてそれには彼女一流の修飾や誇張がつけ足されてゐた。

「その山田のお稻荷さまは何てまあ親切なお方でせう」

と直子は皮肉りながら女の油氣のない額の髪の毛の生へ際へちろりと視線をやつた。

「だが悪いことは出来ないものね」

と彼女は戻つて來た「虎の子」の時計を指の先きで撫でまはしながら低い併し力のこもつた聲で云ふのだつた。時計は三時二十分で止まつてゐた。

それをきつかけに女はお源の平生を散々惡口云つた。早く獨りになりたいと切に希望しながら直子はこのはしたないものの云ひ様にハラハラしつゝもしまひまで聞かねばならなかつた。

遂に「音」の妻君は歸つた。彼女は今や時計と相對した。時計から母を連想した、母は死んでゐる。夫を思つた、夫は出てゐる。天地に時計ばかりが唯一つ自分に殘されたものゝやうに思はれた。その時計も死んでゐる。三時二十分で死んでゐる。この母の魂を直子は熱い目を見はつてまたたきもせず眺めてゐた。

(をはり)